

沿 革

1. 沿 革

古代 「古語拾遺」によると、天^{あめの}富^{とみの}命^{のみこと}が阿波^{あわの}斎^{いんべ}(忌)部を率い東国におもむき、麻・穀^{よき}を栽培させた。このとき良質の麻が生育したところを総^{よき}の国といい、阿波斎部が居住したところを安房郡と名づけたという。後に都に近い所^{かみ}を上つ総、遠い所を下つ総といった。こうして安房、上総、下総の三国が定まったのである。

上代 大化改新以後はそれぞれの国には国府が置かれ、その所在地は安房国府(安房郡三芳村)上総国府(市原市)下総国府(市川市国府台)であった。そこには蝦夷経営の要地として軍団が設けられ駅の制度も整えていた。そして奈良時代にはこの三国にそれぞれ国分寺が建立されて地方文化の中心となった。

平安時代には地方政治がびん乱して、天慶年間には平将門の乱が起こりついで平忠常も反乱を起こしたが源頼信に降り、のち上総介に任ぜられ、子孫は前九年、後三年の両役に軍功があつて、両総の権^{ごんの}介^{すけ}となり、千葉氏、上総氏として権威を両総にふるった。

中世 源頼朝が鎌倉に幕府を開くことに先立って千葉常胤、上総介広常は功があり房総に大きな勢力を占めた。のち室町、戦国時代となり中央政権の争奪戦^{かん}や関東管領^{とうかんれい}の対立抗戦の中に巻きこまれた。

近世 豊臣秀吉が天下を統一し関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くと、房総の地はおひざ元として重要であるため幕府は天領、旗本領や佐倉藩をはじめ譜代の小藩を配置した。初期には10藩、幕末には16藩、明治初年には23藩であった。

現代 明治元年、王政復古^{みやうこく}が成ると大名領以外の地に安房上総知県事と下総知県事とがおかれ、2年には宮谷^{みやざく}県と葛飾^{かきし}県となり、同年6月版籍奉還によって旧藩主は藩知事となり、4年7月廃藩置県によって県となった。

安房では館山^{くわんざん}県ほか3県、上総は大多喜^{おほたき}県ほか10県、下総は佐倉^{さくら}県ほか6県、更に同年11月改めて上総、安房両国を合わせて木更津^{きさらぎ}県を、下総国には印旛^{いんぱん}県をおき、6年6月木更津、印旛の両県を廃して千葉県とし県庁を千葉町においた。

8年5月新治^{しんじ}県所管の香取^{かき}、匝瑳^{ささ}、海上の3郡が千葉県の管地となり、猿島、結城、岡田、豊田郡および葛飾、相馬郡の一部を茨城県に割いて、江戸川、利根川を境界とする現在の千葉県の境域が決定した。